
日本金融資本分析

柴垣和夫 著

東大社会科学研究叢書 14

東京大学出版会

著者略歴

1934年 東京に生まれる
1956年 東京大学経済学部卒業
1961年 東京大学大学院社会科学研究所
応用経済学博士課程修了
1961年 東京大学助手（社会科学研究所）
1965年 東京大学助教授（社会科学研究所）
1966年 経済学博士（東京大学）
1973年 東京大学教授（社会科学研究所）

主要著書

『三井・三菱の百年』中央公論社
『日本資本主義の論理』東京大学出版会
『日本経済研究入門』（佐伯尚美共編）東京大学出版会
『社会科学の論理』東京大学出版会
『世界のなかの日本資本主義』（編）東洋経済新報社

現住所

横浜市緑区美しが丘1丁目18番地3-8-501

日本金融資本分析

1965年9月30日 初版
1983年4月25日 第8刷

検印廃止

© 著者	柴 垣 和 夫
発行者	江 村 稔
印刷者	田 中 昭 三

発行所 財団法人 東京大学出版会

113 東京都文京区本郷 東大構内 電話(811)8814 振替東京 6-59964

理想社印刷・新栄社製本

3033-40268-5149

はしがき

社会科学の研究に携わるものが、その広汎な研究対象のうちから何をみずからの課題として設定するかは、個人的関心にもよることながら、その時代の要請に大きく左右されるといわなければならない。その点では、わたくしのばあいも、けっして例外ではありえなかった。わたくしが本書で追究しようとした対象、およびそのための方法、分析視角については、序論で正面から論じているので、ここでは本書のなりたちを記すことによって、わたくしの問題意識の深化の過程をあとづけたと思う。

わたくしが東京大学経済学部を卒業して大学院に進学したころ、独占資本ないし金融資本の分析は、日本資本主義研究のなかでもっともおくれた研究分野のひとつであった。それは、戦前以来の研究が社会主義運動の戦略論と関連して、とかく農業問題に集中されがちであったことの結果でもあったが、さらに、農業部面において、後進資本主義国としてのわが国の特質がもっとも鮮明にあらわれていたからでもあろう。わたくしの課題設定の動機は、さしあたりは右の空白を埋めたいという比較的単純なものであった。ところが、研究をすすめてゆくなかで、やがて二つの容易ならぬ問題に当面し、それに関連してわたくしの問題意識も形成されていったのである。

すなわち、第一に、農業問題の研究の深化の過程で、わが国のように資本主義のもとで小農が支配的であり、それが資本家的発展の展望をもちえないといった現象は、じつは日本の特殊性でかたづく問題でなく、帝国主義段階で世界史的に共通な現象であることが明らかにされるとともに、その段階の支配的資本をなす金融資本の明確な分析が、

重要な意義をもつものとして要請されてきたこと、これである。たんに農業問題のみではない。前世紀末から今世紀にかけて新たに登場してきたさまざまな社会経済現象——中小企業問題、労働問題、慢性不況等々は、いずれも金融資本の成立と因果関係をもつものとして再検討をせまられたのであった。かくて、金融資本研究こそ現代資本主義解明のための重要な鍵とされ、先進諸国のそれを対象とした先学によるいちれんの研究成果が発表されてきた。本書もまた、まずしいとはいえ、かかる問題意識にもとづく研究系譜の延長線上の所産である。

第二に、より現実的な刺激として、第二次大戦後の日本資本主義における、独占資本＝金融資本の特徴的なビヘイヴィアがあった。戦後、アメリカ帝国主義による支配の側面はさておき、国内における唯一の支配階級としてみずからを形成した独占資本は、いわゆる高成長下において外部資金を最大限に動員しての高蓄積をおこない、またいわゆるワンセット主義による支配集中を強めてきたが、いったいかかる諸特質はいかなる根拠をもって展開しているのか。現実それ自体にそくした分析は、最近ようやく深化しつつあるとはいえ、それを日本資本主義の歴史的体質にまでさかのぼって究明する作業は、こんにちなお残されたままである。しかも、そのさい戦前の日本金融資本にかんする研究は、農業問題などのばあいとくらべてはるかに乏しかった。そのためわたくしの努力も、さしあたりは戦前の時期に集中せざるをえなかった。その点では、本書は、「現代日本金融資本分析」のための準備的作品といっている。

ところで、本書はわたくしにとつて、大学院以来九年余の研究のいちおうの決算である。この間、多々まわり道もしたが、費した歳月の長きにくらべて成果のまずしさを反省するとき、忸怩たるの感を免れない。しかし、もし本書が多少とも学界に寄与するところがあるとすれば、それはもっぱら、わたくしを指導してくださった諸先生、諸先輩のおかげであり、友人諸君のおかげである。とりわけ大内力先生には、わたくしが経済学部で先生の演習生であったころから一貫して御指導をいただいた。わたくしの経済学にたいする理解の、もし正しき面があるとすればその大部

分は、先生に負うものであるといっても過言ではない。また、加藤俊彦・遠藤湘吉の両先生には、大学院進学以来、研究上の御指導はもちろん、公私両面にわたって、あるときはきびしい御叱正を、あるときは暖かいげましのことをいただいた。さらには、戸原四郎氏をはじめとする世界経済研究会での先輩・友人諸君との議論が、いかにわたくしの学問形成に大きい影響をもたらしたかは、はかりしれないものがある。過去をふりかえって、多くの良き師と、先輩、友人に恵まれたことに身の果報を感じるのみである。

また、助手として奉職以来、東京大学社会科学研究所からは多大な研究上の便宜をあたえられた。今回、全面的に改稿したが、本書の原型は同研究所の紀要『社会科学研究所』第一五巻第二号および第三・四合併号（一九六三年）に掲載したものである。高橋幸八郎前所長、有泉亨現所長をはじめ、同研究所の諸先生、先輩、同僚諸君に厚くお礼を申しあげるしだいである。最後に、本書の出版は、東京大学出版会、とくに石井和夫氏の御好意によるものであり、製作にあたっては、わたくしの怠惰のために、同出版会の上林誠二君にたいへん御迷惑をかけてしまった。おわびとともに感謝の念を記させていただきたい。

一九六五年初秋

東京大学社会科学研究所にて

柴垣和夫

第五刷にあたって

本書刊行後、幸いにも多くの書評を得たが、数年前に、それらにたいするわたくしなりの回答を書く機会があたえられた。拙稿「日本金融資本の特質」（東京大学社会科学研究所紀要『社会科学研究』第二四巻第二号、一九七二年、所収）がそれである。記して読者の参考に供するしだいである。

一九七五年四月

著 者

大内 力著	国家独占資本主義	UP選書二九〇頁 定価 一二〇〇円
加藤俊彦著	本邦銀行史論	A5 定価 二六〇〇円
加藤俊彦編	日本金融論の史的研究	A5 定価 九八〇〇円
志村嘉一著	現代日本公社債論	A5 定価 二八〇〇円
志村嘉一編	日本公社債市場史	A5 定価 五四〇〇円
大内 力著	日本經濟論	上巻 二四〇〇円 下巻 二四〇〇円
大内力編著	現代日本經濟論	A5 定価 四五〇〇円
柴垣和夫著	日本資本主義の論理	UP選書二五〇頁 定価 九八〇〇円
柴垣和夫著	社会科学の論理	UP選書二六〇頁 定価 九八〇〇円
大内 力編	現代資本主義の運命	UP選書三〇〇頁 定価 九八〇〇円
馬場宏二著	現代資本主義の透視	UP選書二四〇頁 定価 九八〇〇円
石井寛治著	日本經濟史	A5 定価 一六〇〇円

ここに表示された定価は、物価の変動などにより
変更されることがありますので御諒承ください。

目次

はしがき

序論

一 方法

二 対象

三 分析視角

前篇 史的分析

第一章 原始的蓄積期——商人資本Ⅱ「政商」としての発祥

第一節 原蓄期の日本資本主義

第二節 特権政商としての三井・三菱

一 三井における政商活動の展開

二 三菱における政商活動の展開

三

三

三

一八

二七

二七

四〇

四〇

五〇

三	小 括	三
第三節	官業払下げによる多角経営の原型の成立	七
第二章	産業資本段階——「綜合事業体」としての定着	六
第一節	日本における産業資本段階の特質	六
一	一八九〇年代の日本資本主義	六
二	綿糸紡績業の産業資本的確立とその欠陥	七
第二節	「政商」資本からの脱皮過程	一〇
第三節	「綜合事業体」としての定着	一七
一	流通部門——産業資本の補強装置	一七
二	生産部門——輸出産業としての鉄礦業経営	一九
三	資金調達ならびに金融機関	一〇
四	総 括	一五
第三章	帝国主義段階——綜合コンツェルンの成立と展開	一五
第一節	日本帝国主義の成立過程とその特質	一五
一	帝国主義段階への移行	一五
二	重化学工業の形成とその限界	一六

三	資本集中の二類型	一七五
第二節	財閥コンツェルンの成立	一七五
一	多角経営の展開と金融資本的蓄積方法への変質	一七五
二	コンツェルン形態の成立	一七五
三	資本蓄積の金融形態	一七五
第三節	コンツェルンによる支配集中の展開	一七五
第四節	総括	一七五

後篇 構造分析

第一章	産業的基盤と独占形態	二六五
第一節	問題の所在	二六五
第二節	日本資本主義の産業構造と財閥の事業基盤	二七〇
一	概観	二七〇
二	鉱工業、公益事業部門における財閥の地位	二八三
第三節	産業独占の構造——コンツェルンとカルテル	三〇〇
一	「資本独占」としてのコンツェルン形態	三〇〇
二	コンツェルンとカルテル	三〇八

第二章 資本蓄積の金融構造……………三二五

第一節 問題の所在……………三二五

第二節 金融市場と財閥……………三二九

一 財閥における株式資本……………三三〇

二 社債発行市場と財閥……………三三九

三 金融資金の需給構造と財閥系金融機関……………三三九

第三節 自己金融的蓄積機構の内部構造……………三六六

第三章 財閥商社論……………三九

第一節 問題の所在……………三九

第二節 財閥商社論……………四〇三

一 日本資本主義の流通機構と財閥商社……………四〇三

二 財閥商社の資本的性格……………四一三

むすび——総括と展望……………四九

図表一覧

日本金融資本分析

——「財閥」の成立とその構造——

序論

一方 法

日本の金融資本を問題にするばあい、銀行・信託・保険などの金融業務にたずさわる資本をもってそれと規定する見解は、けっして少なくない。たとえば『日本コンツェルン全書』（一九三七—三八年、春秋社）の執筆者たちの理解は、おおむねそうだといっている。戦前の金融資本研究の先端に位置した高橋亀吉氏や鈴木茂三郎氏らの理解にも、そうした把握を散見することができる。だが、こうした理解にたつたばあい、金融資本が資本主義の特定の発展段階＝帝国主義段階における支配的資本として有する特殊の意義が、資本主義一般につうじる金融業務のなかに解消されてしまうのであり、初歩的な誤謬であることはいうまでもないであろう。

- (1) たとえば、和田日出吉氏の「三井の金融資本を代表するところの三井銀行、三井生命・三井信託」(第二卷『三井コンツェルン読本』一四三頁)といった表現、岩井良太郎氏の「三菱銀行・三菱信託・東京海上火災等の三菱直系会社の金融資本による事業支配」(第三卷『三菱コンツェルン読本』二一〇頁)といった表現などをみよ。

- (2) たとえば高橋亀吉氏の「わが金融資本（銀行、信託、保険における預金的性質の資金）の約五割……」(『日本財閥の解剖』〔中央公論社、一九三〇年〕一五頁)、鈴木茂三郎氏の「金融資本は、ひとり銀行資本にとゞまらない。信託、保険もまた金融資本の重要な機関であつて……」(『日本独占資本の解剖』〔学芸社、一九三五年〕三三頁)などの表現をみよ。

いうまでもなく、金融資本とはたんに金融業務をつうじて価値増殖する資本の呼称ではない。金融資本概念については、周知のようにヒルファディングによる「現実には産業資本に転化している銀行資本」^③とか、「銀行が処理し産業資本家が充用する資本」^④とかの定義や、レーニンによる「生産の集積、そこから発生する独占、銀行と産業との融合あるいは癒着」^⑤という定義が、その古典的規定としてあまりにも有名であるが、これらの諸定義の社会科学的意義は、それがまさに一九世紀末以降の「最近の資本主義的發展」(ヒルファディング)ないし「資本主義の最高の段階としての帝国主義(段階)」(レーニン)における資本の支配的存在形態をさすものとして、それ以前の産業資本概念と區別して定立されたところにあつたのである。このヒルファディング、レーニンによる金融資本範疇の定立こそ、マルクス経済学をして資本主義社会の基本的運動法則の認識から、さらに帝国主義というその特定の發展段階の現実的説明をも可能ならしめたのであった。

- (3) R. Hilferding, "Das Finanzkapital", Dietz, 1935, S. 335. 林要訳『金融資本論』(大月書店、一九五二年)三七三頁。
- (4) Ebdenda, S. 336. 邦訳、同前書、三七四頁。
- (5) レーニン『帝国主義』宇高基輔訳(岩波文庫版、一九五六年)七八頁。

だが、右のごときメリットを有するこの古典的規定も、今日の研究水準からみるならば、なお一定の不充分さをまぬがれていなかったといわなければならないのである。それは端的にいつて、つぎの点に集中的にあらわれていた。すなわち、ヒルファディングにしてもレーニンにしても、かれらはいずれも、「銀行と産業との融合・癒着」といった形態的特質をもって金融資本の普遍的形態ないし本質規定としているのであるが、各国資本主義の個別的研究が深化される過程で、この本質規定とはかなりのへだたりをもった、各国金融資本の独自の現実形態が検出されてきたのである。こうして、一方で帝国主義段階の支配的資本として共通の本質を有する金融資本が、他方で各国独自の異

なった形態で成立するという点を、いかに統一的に把握するか、という難問が生じてきたが、この点についてこれまでの多くの論者は、現実を重視することによって古典の規定の内容を修正したり（古賀英正『支配集中論』、同『日本金融資本論』）、あるいは金融資本概念そのものを放棄したり（P. M. Sweezy, "The Theory of Capitalist Development" 中村金治訳『資本主義発展の理論』）、あるいは現実のなかから古典の規定に適合する事実のみを抽出したりすることによって（生川栄治『イギリス金融資本の成立』）、それを「解決」してきたのであった。⁽⁶⁾そして、このような問題は、わが国の金融資本を対象としたさいにも、その当初から存在していたのである。

（6）これら、古賀英正、スウィージー、生川栄治の諸氏による「解決」のころみの難点について、くわしくは、拙稿「日本金融資本研究序説（一）」『社会科学研究』第一五巻第二号、一九六三年所収）一一—一七頁をみよ。

すなわち、わが国においてレーニンの意味における金融資本、つまり日本帝国主義の支配的資本としての金融資本がはじめて問題にされたのは、一九二七年に野呂栄太郎と高橋亀吉氏とのあいだでおこなわれた、いわゆる「プチ・帝国主義」論争⁽⁷⁾においてであった。この論争は当時の社会主義運動の反帝国争にたいする高橋氏の批判に端を発したすこぶる政治的な論争であったが、その理論的論点は「日本がはたして帝国主義といえるか否か」という点にあり、その論争のひとつとして金融資本の有無が争われたのである。そして、そのさい右の点の判断の基準には、いずれにあってもしレーニンの『帝国主義論』における金融資本の規定がもちいられたが、その規定そのまゝの実態がわが国に存在しなかったことから、規定の適用によって「実証」された結論は、野呂の肯定にたいするに高橋氏の否定と、まったく逆のものがみちびきだされたのであった。すなわち、高橋氏がレーニンのいう産業の集中や独占、あるいは銀行と産業との融合といった金融資本関係はわが国ではみられないと主張したのにたいして、野呂は高橋氏の実証の不正確さやレーニンの定義の適用における「型式主義」を批判しつつ、「総ての定義は一般にただ限定された且つ相